

Ⅱ―9 東アジアにおける日本の位置

(議長 本間長世)

W・F・ヴァン・ドゥ・ワラ

発表者 W・F・ヴァン・ドゥ・ワラ

方法的考察

東洋に於ける日本の位置を考察するに当たって、まず第一に日本人自身から見た日本の位置づけ、そして中国人を始め東洋諸国から見た日本像、さらに西洋から見た位置づけという三つの観点から取り上げることが考えられる。こうした考察の角度に基づいて区別したアプローチに加えて、さらに日本人自身に於ける位置づけの形態に焦点を絞る場合、それを三つのレベルで追究する方法が含まれている。第一のレベルは、日本の地理的位置であって、交通手段の発達していない時代には、それが決定的な意味をもっていた。第二は、その歴史的経過としての文化的位置づけである。日本の場合は、それが中華文化圏に属する国としての位置ということになる。第三のレベルは、日本人が認識の上で自分や自国を位置づけている位置である。鎖国の終わり頃までは、日本人の世界地理に関する知識が希薄であった為に、彼等の世界観に著しい限界があったことも事実である。したがって、近代までは客観的な地理の知識と主観的世界観が一致するまではいかないにしても、密接な関係にあったことは言うまでもない。

(1) 日本人自身から見た日本の位置づけ

(a) 神道

日本固有というべき観念・信念群たる神道に依れば日本は神

の国である。神話時代には外国という観念も意識もなかったと思われる。自国国土を世界のなかに位置づけるには、その国土を外から眺める機会に恵まれると同時に、国土の全体を把握することが前提となる。視線が地平線までしか及ばない古代日本人にとって両方の条件とも満たされていなかった。「国」と「陸」を同一視している人間にとって、自分の生活圏をより大きなコンテキストの中へ位置づける場合は、むしろ天上界及び地下界との対立において位置づけするはずである。天上界としての高天原と地下界としての黄泉国に対する葦原中国という地上界がそれである。従って日本が世界の中心にあるか、またはその周辺にあるかは、関心外である。むしろ日本が世界そのものである。

(b) インド伝来仏教の世界観

大陸文化が日本に到来するに及んで、日本人は「自」と「他」という対立概念によつて自分の位置づけの見直し、もっと正確に言えば自分を自分より大きなコンテキストの中へ位置づけることを余儀なくされるようになる。大陸文化の中核を成した仏教の東漸によつて印度伝来の宇宙観と中国的世界観を混合した様な内容のものを受容する結果となった。

まず、印度仏教における伝統的世界観の概略を述べたいと思う。出典によつて多少の異同はあるが、『俱舍論』には体系的に説かれているので、しばらくそれによることとする。地上世

界は、平円盤状と思われ、その中心を巨大な山峰たる須弥山が占めており、それを取り巻く七重の山地と水域、その外側の大洋に横たわる四つの大陸、最外周の山地からなるものである。印度や中国を含む現実の大陸は、須弥山からみて南に位置し、南瞻部州、または閻浮提という。南に行く程尖っていて、その形は逆三角形に近い。この大陸の南半を占める印度の北に、大雪山（ヒマラヤ山脈）があり、そのまた北には香醉山と言う山がある。ちなみにバラモン教では、閻浮提は須弥山に隣接しているのに対して、仏教の教典では海に浮かんでいるが、構造の上では大した差異はない。須弥山の北、東と西に位置する三大大陸は、空想的なものであるから、含蓄として日本も閻浮提に位置しているわけである。

(c) 中国伝来の世界観

漢民族の地理的世界観は、既に紀元前の成立とされる著者不明の辞書『爾雅』に述べられている。「九夷、八狄、七戎、六蛮、これを四海という」とある。これによれば、漢民族居住地の周囲に広がる、異民族の居住する地域を「四海」と呼んでいた事が分かる。ここで言う「海」とは、「晦」（くらい）という意味であって、実在の水域ではないようだ。更に「四海」の外側の一層実情の分からない空間を指す言葉として「大荒」、「四荒」という語も使用されている。

一方、古代や中世中国の地図には、日本を始め周辺にある諸

国は掲載するに足らないものとして扱われた。地図がいかに大きかろうと、作図の意図は中華の歴史と現勢を示すことにあったわけで、東夷のひとつにすぎない倭人の国土を登載する余地はなかった。宗代の地図においてさえ、単に日本関係の地名が東海中に点々と、島としての実際の輪郭を持たないままに記入されているだけである。その結果、古来中国から伝来した地図に朝鮮や日本などを増補するのが朝鮮では習わしになっていた。

(d) 日本人による翻案

以上述べてきた外来の世界観をもとにして、日本人は自国国土をその広大な世界の中へ位置づけることを試みた。仏典は日本の国土を明記しないが、鳩摩羅什によって漢訳された教典『仁王般若経』には、「粟散王」という語がみえる。粟散王というのは、天下に君臨する鉄輪王に対しての群小の王達のことをさす。この表現は特に日本の君主を指している訳では勿論ないが、大陸の天竺や震旦（支那）の国土の広大さを知るに及んだ日本人が狭小な自国国土にその表現を当てはめたのである。粟粒を散らしたように大小数多くの島を含む自国国土にふさわしい表現だと思われたであろう。日本中世では「辺地粟散」と言う語が日本を指す表現としてしばしば用いられるのは上記の仏典の用語に由来するものである。つまり、日本は南瞻部洲の一番外れに位置することになる。日本が小国である認識は少なくとも十二世紀まで遡る。『今昔物語』巻十一には、「僅かニ小

国ノ太子トシテ、妙ナル義ヲ弘メ、法ナキ所ニ一乗ノ理ヲ説…」とある。

解脱坊貞慶の『愚迷発心集』には、「仏前仏後の中間に生まれて、出離解脱の因縁も無く、粟散扶桑の小国に住して…」という一節がみられる。

貞慶の『愚迷発心集』から引用した上記の一節が示すように、辺土である概念と末法思想は結び付いていた場合が多かった。即ち日本は世界の辺境にある小国であると同時に、時間的にも、仏法が衰微・消滅していく末法時代に生きているわけである。末法に在世というのは、人類共通の苦境であるが、更に世界の辺境に生きるという境遇は日本人だけが立たされる。

一方、日本は天竺や震旦と並んで仏教国であるという意識もまた中世の文献において見られる。天竺・震旦・本朝の総称として「三国」がよく用いられるのはその意識に基づいたものである。印度伝来の仏典にはその表現が出ていないことは言うまでもないが、それが初めて用いられるのは日本人学僧の仏教史家の著作である。具体的に言うなら、道元の『正法眼蔵』における「三国の諸方にある前代後代」という記述が最も早い用例の一つと思われる。たとえば、凝然の著作たる『三国仏法伝通縁起』の表題が示すように、それらの学僧は、日本が仏教国であり、紛れもなく仏教圏諸国の一員であった事を主張する意図があった。

ところで、この語が一般社会に普及していくにつれて、仏教

圏という意味合いが次第に薄れて、やがてただ既知世界そのものを指す語に過ぎない様になる。そして、近世に入ると、宗教による精神支配の後退と相まって、粟散辺土や三国と言う觀念も次第に消え失せ、新しい国土觀が芽生え始めた。その新しい思潮の先駆者の一人には、山鹿素行（一六二二―一八五）を挙げることができる。その『謫居童問』には、「大唐・朝鮮・本朝、この三国天地の中道に当たれり。」

「本朝は海中に独立して四時不違、五穀常に豊饒なり。是れその天地の中精を得ればなり。」

「天地の運るところ、四時の交るところ、その中を得れば、風雨寒暑の会偏ならず。故に水土沃して人物精し。是れ乃ち中国と称すべし。」などがある。

これらの引用文は正しく三国概念から中土觀への過渡過程を示すものである。そして文明ではなく、氣候という転喻でもって表現される自然の点から言って、日本が世界の中国であると言う意見には、文明本位の態度から自然本位へと指向を換える傾向を窺わせるものがある。こうした辺土から中土への転換は近世初期から見られ、マテオ・リッチの、東亜細亜を圖のほぼ中央に位置した卵形図法世界地図に示唆を受けたと推定されるが、儒学の中華思想に対抗して日本が中国の属国（しよくこく）たることを否定する国学が台頭する機運との関連において理解すべきである。

(e) 国学による世界観の転換

徳川前半における思想史の主流をなす儒学の世界観には、中国が中心を占めている。それは歴史的な存在としての中国ではなく、天道や道理や名義を至上価値とする文明そのものを具現する、超歴史的規範としての中華であった。それに従って、日本の儒者が自分の国を東夷と見なしていた。換言すれば、中国からみては「内」が文明の発祥する中心であり、「外」が徐々に同化していく蛮夷を意味するのに対して、日本人にとっては、その対立概念が逆転し、「外」が規範的で貴ばれ「内」は卑下され、軽視される状態であった。ルネッサンス時代、ギリシャやローマの古典文化を西洋文明の基礎として再評価する西洋各国の態度と相通ずるところがある。

中華文化が日本文化において基礎価値をふくむ深層を成すものであったとすれば、国学者の目指したのは日本文化の抜本的な方向転換というほかはない。単に中土に中国と日本を入れ換えるにとどまらず、中華文化とそれを支える漢字を現実から遊離した技巧として否定し、自然に行動や思考の規範を求める思想を打ち出した。

賀茂真淵は『国意考』で「ただ唐国は、心わろき国なれば、深く教てしも、おもてはよき様にて、終に大なるわろごととして、世をみだせり。此国は、もとより、人の直きくににて、少しの教をも、よく守り侍るに、はた天地のまにまにおこなふこと故に、をしへずして宜しき也。…」と述べている。日本は天地自

然に即して治まっているのに対して、中国は人工的な教えである儒教に則って政治が行われているのでしばしば乱れる状態に陥る。したがって、貴卑の基準をもって国の優劣関係を決めるなら中国を貴とし、夷を卑とする根拠は全くない。特に夷の出身者でも中国の天子の位について中華を支配する事例が数多くあるからなおさらのことだ。そこで貴卑の価値が逆転し、中国が天地自然から離脱してしまった国で、日本は天地の心を純粹に守り続けた国であるという結論が導かれる。一方、儒教が渡米した後、日本も乱れる動向を呈し始めた、

「此儒のこと、わたりつるほどに成て、天武の御時、大なる乱出来て、夫よりならの宮のうちも、衣冠調度など、唐めきて、万うわべのみ、みやびやかになりつつ、よこしまの心ども多くなりぬ。」

中国文化の導入により日本は楽園の状態からの変遷によって特徴づけられる歴史の流れに突き落とされたのである。歴史と文明が天地自然との対立概念であるとの視点に立脚する国学者は、中国と文明を同一視する点に於いては儒学者とかわらないが、文明を否定的に評価するところに彼等の発想の新しい転換をみいだすことができる。そして、中華文化を超歴史的な絶対性を有するものとする立場の矛盾を指摘するのを怠らない。逆に、中国を歴史の中へ編入し戻すことによって儒家の説く理念の失敗を論証すると同時に、日本に超歴史的資格を与える。

「我國の、むかしのさまはしからず。只天地に随て、すべら

ぎは日月也。臣は星也。おみのほしとして、日月を守れば、今もみること、星の月日をおほふことなし。されば天つ日月星の、古へより伝ふる如く、此すべら日月も、臣の星と、むかしより伝へてかはらず。」

本居宣長は、賀茂真淵の思想の延長線の上に立って、人間社会を治める理念としての中国、換言すれば文化の源泉としての中国を徹底的に否定し、中国を文明・人間社会のあるべからざる艦 (speculum) として提示している。そして中国を否定した上で、新しい世界秩序の原理を提言しなければならない。その必要性に迫られていたまさにその時点において、西洋列強が登場した。これに依って世界秩序が事実上一変した。

その新しい秩序へ日本を理論的 (イデオロギーのレベルで) に編入することを試みた国学者に大國隆正 (一七九二—一八七二) がいる。大國隆正はこれをその著作『新眞公法論』の中で、「万国公法」とよんでいる。中華対夷狄という上下・主従関係の意味合いを含蓄した観念を排して、「万国公法」を立論しているが、それを論理的枠として認めながらもその具体的な内容を否定している。つまり、「万国に統轄 (すめくくる) 君あることなし」と「万国同等のもの」とする西洋の公法学も「眞の公法にあらず」と断っている。大國隆正は万国相互関係を宇宙開闢論と結び付けている。即ち「はじめにうみたまへる万国は、女人先言 (よにんせんげん) といひて、下克上のくになり。にちにうみたまへる日本国は、改言といひて、上生下のくにな

り。

これにより、万国はその王統さだまらず、日本は神代より皇統たがはせたまはず。これにより、日本を本とし、尊しとし、万国を末とし、卑しとするなり。」と述べ、イデオロギーの面で完全に中華文化圏から脱皮した意見を唱えている。幕末の国学者にとっては、中国はただ万国の中の一国に過ぎないものになちてしまった。

佐久間象山 (一八一—一八六四) は、「内」 (中国) 対「外」 (西洋) または中華対夷狄という対立に基づいて世界を整理することをすべて排撃し、万国同等である視点に立ち、西洋の夷狄も高度な文明を生み出したと力説している。文明の有無を判断する基準はもはや中華文化の規範ではなく、普遍的な理念に帰納するものとされたので、文明は万国共通の特性になった。

(f) 中華規範の最後の適用

明治五年、王政維新の祝儀を目的として琉球国王尚泰からの使者が明治天皇に拝謁した。日本に遣わされた最後の琉球国使節であった。その際、朝貢という擬制をとりながら、実際は琉球国の琉球藩への格下げが行われたのである。琉球帰属問題の解決は、近代国家の樹立を目指す新政府の懸案の一つであった。明治四年薩摩藩の施行に引き続き、琉球国と薩摩藩の後身である鹿児島との関係をどう処分するかが急務になった。歴史

的に清国と冊封関係にあり日清に両属する琉球を名実共に日本の国内に統合することを目的に、とりあえず最初の段階として琉球国王を琉球藩主に宣下する詔勅が下された。

この詔書には、琉球王に対して今まで朝貢に基づいた国交関係に使われて来た用語を使っている一方、実際は、琉球国の独立を奪い、完全に日本国に編入する意図が窺われる。それが琉球国を廢することを意味するとは琉球側に理解されなかった。琉球側には近代国家の到来が見られなかった。これは事実上、中華的東洋世界の崩壊の嚆矢であった。

(2) 中国人から見た日本像

中国人は日本が明治維新後は、従来の太陰暦を放棄して太陽暦を採用し、服装を洋風に変え、漢籍を蔑視していることを、長い間恩恵を受けてきた中国文化の圈内からの離脱をはかっているものと受け取っていた。福沢諭吉も脱亜論を書いており、日本は、本格的に亜細亜から離脱し、積極的に西洋の一員になろうとしていたのである。現時点から見れば、確かに離脱はあったが、中国人が憂慮していた通り、日本がその結果西洋の一員になってしまうという展開にはならなかった。

Leon Vandermeersch 氏は、その著 *Le nouveau monde sinise* の中で、漢字文化圏に属する諸国同士の連帯感を主張している。氏は、日本をはじめ、元々漢字文化圏に属していた諸国がその母体から脱落した結果、その文化圏が分裂してしまった理由を、

自由主義から共產主義までを含む西洋のさまざまなイデオロギーの進入によるものとしている。逆に、西洋の影響が減少し、漢字文化圏諸国が目覚しい発展を成し遂げて見せた現在、改めて自らが漢字文化圏に属しているという認識が強くなってきている。その漢字文化圏への復帰をいちはん端的に裏づけているのは、一九七二年に復活した日中国交関係であるとしているが、日本が漢字文化圏に属する認識は日本人にも中国人にもかなり薄いと言わなければならない。

(3) 西洋から見た日本像

一九六〇年まで、日本はアジア大陸の極東に位置する辺境地にすぎず、その文化の異質性がその地理的距離に比例するまさしく別の世界であったというのが、ヨーロッパ人にとっての日本像であった。この常套化した日本像は主として十九世紀後半の、ヨーロッパ人の手になる紀行文、小説等とその源流をもつもので、その根強いことには驚かされる。

自由主義圏の先進七ヶ国のサミットが定期的に開催されているのは周知のとおりであるが、目立つのは、日本を除いては参加国は全てが欧米諸国であることだ。日本は異例な立場に置かれている。文化や価値観が大幅に異なっている国が国際舞台で主役を演じることは、日本も西洋諸国も不慣れの観がある。国際政治・経済・貿易、さらに科学・文化交流面での国際関係までが西洋諸国が決めたルールに則って行われていると言って

も過言ではない。先進国群の形成した秩序に仲間入りさせてもらいたい新興国にとっては、そのルールにしたがって行動することが不可欠である。

明治以降日本政治の基調は、国際社会の一員になることであった。倒幕によって自らのミクロコスモスから突き出された日本は、いきなり国際社会の数多くの成員に取り囲まれるに至った。その新しい環境の中で生存する為に、仲間に入れてもらうよう務めた。特に伊藤博文はその点で常に外国に於ける日本の受容のされ方を配慮して、西洋富強国家に近い日本国像を作り上げたいという願望を抱いていた。

しかし、それらのルールは、西洋という特殊な文化、社会環境の中で醸成されたものである。ルールをもとの環境から取り去ってそのまま移植することには無理がある。同時にルールが醸成された土壌の一部も取り入れなければならない。幕末明治維新当初、和魂洋才を唱えて、西洋の科学文明だけを受容しながら、伝統的な日本文化を守ろうという試みがなされたが、西洋の精神文化、社会制度等も同時に雪崩のように流入してしまっただけで、流入せざるを得なかったのである。換言すれば、武士道のようなものを唱道しながら現代産業社会を構築することは不可能であった。同様に、憲法に基づく議会制度を採用した時、その土壌となるべき人権、個人の自由を尊重する社会風習を醸成しない限り、制度そのものも生きてこないのである。

この態度と対照的に、十九世紀の中国では、自分が世界の中

心であり、文明の頂上にあるという、所謂中華思想が西洋進出への適切な反応を遮り、次第に中国を半植民地の状態に転落させてしまった。自分を世界の中心に位置づけること自体が致命的であった。その反対に自分を世界の周縁に位置づけることが日本を救う活路であった。中国には科学の長い伝統があったにも拘らず、そのノー・ハウを効果的に活用する社会風土上の条件がみだされていなかった。十九世紀に於ける中国の改革者は物質文明と社会制度や価値観が切り離そうにも切り離せない関係にあることを十分認識していなかった。彼等は西洋から導入する技術を簡単に既存の伝統的政治、社会制度に移植することができると信じていたのである。

そういった意味で明治維新以降、日本が一世紀にもわたって歩んできた道は社会全体の改革という志向で貫かれている。しかし、法令は必ずしも施行に直結しない。抜本的な西欧化は政治的社会的エリートが抱いていた抱負だったかもしれないが、その実現は極めて困難であった。

明治初期、初代文部大臣を務めた森有礼は日本の近代化を推進する上で日本語を廃止して英語に切り替えた方が得策であるとかえり提言したという逸話があるが、ここには当時の西洋化への熱意の一端が窺える。しかし、伝統・価値観・言葉・慣行等は根強いもので、一挙に抹消することはできない。明治維新以来百年以上経った今日、日本はまだ濃厚に「日本らしさ」を守っている。が、その反面、明治維新当時と比較してみると、その

日本らしさが大分薄れていることが分かる。仮に日本国民の理想が、徹底した西洋化の実現にあるとすれば、未だ完成していないといわなければならない。

日本は過渡期にある。その過渡期の一つの特徴は、近代化の実施に踏み切ってから、日本が二つの価値の両立に直面していることだ。二つの文化に跨って、二つの価値観、二つのルール、即ち日本在来のルールと西洋のルール、換言すれば、日本国内のルールと国際秩序に適用されるルールを両立させようとしているのが、日本の現状である。西洋では、これが精神分裂の症候群だと言われることもあるが、日本人がそれに悩んでいる気配はない。二つの価値の両立は、認識レベルでは日本人にとってはあまり問題にはならず、むしろその理解に苦しむ西洋人の問題である。重層性が日本文化の特徴であり、日本文化史は固有文化と異文化を両立させる試みの繰返しだから、日本人は二つの価値に含まれる矛盾をあまり意識しない。各々のルールの適用範囲は余り干渉し合わないように限定されており、各々の適用範囲に見合った規範にしたがって行動するのが日本人の本来の行動様式である。行為者が主観的に指定し、且つ意味づけた行為の場を状況と名づけるが、日本人がこの状況にどれだけ強く依拠しているかは、日常的行為の中に見出せるのみならず、国際関係においても確認できる。国際政治・貿易・外交について言えば、日本は国際貿易の規則、国際機構で締結された規定・条約などを実直に遵守して来ている。その方面において西洋の

得意な手で西洋を追い抜いた観もある。が、それはあくまでも国際関係における姿勢で、日本国内事情は違う。貿易摩擦の一つの原因は日本国内市場の閉鎖的傾向にあるとされるが、日本人の目からみれば、国際市場と国内市場とは条件が違っており、ルールの適用も各々異なった状況に適している。したがって日本人にとっていわゆる非関税障壁には何の不公平も存在しない。西洋諸国が指摘する非関税障壁は、日本国内の市場の状況にすぎない。このように現実の解釈の過程において生じる齟齬が貿易摩擦に結び付く訳だ。既存の秩序を築いたのは西洋諸国だから、自分の文化圏に適用するルールが自動的に国内外を問わず普遍的効力をもっていると思ひ込んでいる。日本国内だけを例外扱いにする訳にはいかないというのが西洋諸国の立場であるのに対して、日本は国内適用のルールと国際秩序のルールを使い分けている。この態度には日本文化の重層性に通ずるものがある。それに深い関係をもっている在来文化と外来文化との問題について触れたい。

しばしば日本文化は模倣の文化であると言われる。それは、明治以前は中国の文化を大量に取り入れたのに引き続き、十九世紀後半から目を西洋に向けて善悪も無差別に何もかも導入してしまふ史実に裏付けられるものとされる。そうだとすれば、日本固有文化は殆どないと言う結論になる。たしかに日本伝統的文化は中華文化の及ぼした広く深い影響を抜きにしては到底考えられないし、現代日本文化もまた今度は西洋文化からの借

用なくしては成立しないのである。しかし、だからといって日本文化は模倣文化だと早合点してはいけない。西洋諸国でも、どれだけ外国の文化を受容したかを追及してみると、日本の場合と殆ど変わらないほど土着性や是在来性の乏しいことに驚く。

中国文化でさえ、世界一の文化を持って自任する中国国民であるが、印度をはじめ、中央亜細亜各国など、中国の周辺にある四方の国々に、長い歴史を通じて多方面にわたって影響を受けたことも事実である。多くの場合、いわゆる固有のものとなさされているものでさえ、その起源を辿ってみれば、実は外来のものであることが分かるケースも少なくない。中国のような文化が、あれほど固有性の強いものに見える理由は、異文化からの主な借用が遠い過去に遡るという事情によるものである。それに対して日本文化が形成されたのは中華文化形成より時代がずっと下がるので、異文化からの主な借用が近世まで続いた。現代になつては、日本に限らず、中国も懸命に西洋に学ぼうとしている事実が示すように、異文化との接触が急激に増える現在、他文化の受容が益々大きくなっていくであろう。従ってある文化を評価するとき、各々の文化の文化要素の起源を基準に

して優劣を決めようとするアプローチは妥当ではない。文化の起源を無視するつもりはないが、起源論よりは共時的な定義を試みた方が有意義だと思う。文化を、ある時点においてある社会を構成する人間が標準・規範・価値・言語・文学・宗教・習慣等として共有・共用・共通にしているものの複合体と定義づけたい。この定義では文化のあり方、その構造と機能が主な課題になる。例えば茶道の起源は中国にあるが、発祥地で廃れたのに対して日本文化の中で極めて独特かつ肝要な役割を果たしている。日本文化全体における茶道の位置、意味付けにその固有性を見出すべきである。

いまや、日本は、西洋文化圏の一員でもなければ、中華文化圏の一員でもない。独立文化として認められているようになったといえる。ある意味では、中華文化圏から「卒業」しているのである。実際、日本文化の西洋化の度合いが進んでいるといえる今日だが、中国人、西洋人を問わず、日本文化を独立文化として見なししている見解が圧倒的に強い。しかしながら過去においては常にそうであったとは限らない。

コメント 田代和生

今までのご発表や、今日のご発表を聞きましても、どちらかという
と思想史の立場から、観念論的な立場において、どう日本を見られる
かという視角であったんじゃないかと思います。

ヴァン・ドゥ・ワラ先生の「東アジアにおける日本の位置」。これ
もやはり観念の世界から見た日本の位置づけとして非常に興味深くま
とめていただきました。私の専門は歴史ですので、史実を重視して、
そういった思想史のほうから見ていくという作業をあまりしないもの

ですから、自分の研究の中でどうこれを反映させていくかという点で、非常に面白い刺激を受けました。

ただ、観念というのは、やはりその時代に生きた人間がつくりだしていくものですから、それがどういう時代背景の中にあつたのかというのを知る必要があるのではないかと思います。特に明治になりまして、いまのご発表にもありましたように、日本は西洋に追いつけ、追い抜けという立場から必死になりだします。ときには福沢諭吉の「脱亜論」などというものが出ますけれども、あれもやはり歴史的な背景を見ますと、それなりの非常なもだえの中から出てきているものです。ただ単にアジアを否定して日本をヨーロッパ風にする、というのではなくて、アジアの中に生きる当時の日本人の苦悩のありさまの中からそれが出てきたのではないかと思います。

日本の位置づけという問題を日本史の立場から考えますと、やはりどうしても一つの節目として見逃してはいけない事象というものがあります。日本をアジアの中でどういうふう位置づけるのか。国ができてきたときに、これを政策の中でどういうふう位置づけていくか。あるいはどう見られたいか。そして、どう振る舞うかということです。そういったような積み重ねが、その時代の生きた人間の観念というものをつくりあげていくという部分があるかと思うのです。

そういった観点からとらえますと、どうしても避けて通れないのは、江戸時代の「鎖国」とその背景になる思想じゃないかと思えます。あれがなぜ可能になったか。なぜあの形ができたかといったこと。それを追求していきますと、幕末期あるいは明治期の「開国」、あるいは欧米にどういうふう立ち向かっていくのかということと、時代的には何百年間も離れておりますけれども、思想的につながる部分が見られるのではないかと思います。そういった中で考えてみますと、江戸時代に日本人がアジアというものを意識し、その中で自分がどう振る舞って、どういうふうに見られたいかという観点において、非常

に意識したのはやはり中国ではないでしょうか。「鎖国」の中で一番重要なポイントとは、つまり中国にあつたということです。

中国と日本は、決して外交関係を持ちません。長崎だけで貿易をやっているのです。これは私的な貿易関係ですけれども、江戸幕府は常に中国を意識しております。意識するがゆえに外交を持たないという非常に不思議なやり方をとります。外交を持ちますと朝貢関係しか許してくれない中国ですから、従ってそれをいさぎよしとしないという思想が、やはり日本の中に生まれてきたということです。中華としての中国、それをいつの間にか自国意識の中にあてはめていく日本、同じように漢字文化を共有した自国意識というのは、それぞれの国にも出てまいります。幕府の「鎖国」のあり方は、非常にそれを端的にあらわしている。特に中国への態度というのは、そういうところに見られるのではないかと思います。

それから、琉球の位置づけも、非常に重要な点です。明治期に廃藩置県のと きにおきまして、琉球国王を御指摘になられたような位置に置きました。ですけれども、あの位置づけはやはり江戸期の鎖国時代にすでにできております。琉球国から朝貢国としての扱いの使者を江戸幕府は受け入れます。島津氏は琉球に侵略して、完全にそこを自分のテリトリーにいたしました。ところが、公的にテリトリーにしますと琉球は貿易をするために中国へ舟が出ません。ですから、「両属の国」という形で、ここを位置づけていくわけです。両方の国に朝貢をするというやりかたで琉球国は江戸幕府に対して使者をよこします。これが、江戸時代に十八回あります。

そのたびに持ってくる国書というのは、必ず將軍あてではなくて老中あてに、しかも上下関係で書かれております。この老中あて、つまり將軍に国書を書くことも許されない位置づけに琉球が置かれているということが重要です。それが江戸時代の寛永年間、一六三〇年代にできてしまう。何百年間もずっとそのルールで動いていく向こうに、

明治のあの位置づけがあるということです。

つぎに、この状態を中国がどう見てきたかという点にうつりましょう。いまご発表になりましたところで、日本人自身の日本の位置づけと同時に、東洋諸国、特に中国人による日本の位置づけ、欧米人による日本の位置づけ、このことは対外関係を専門とする者にとりまして非常にフレッシュな御指摘かと思えます。中国の人たちが、日本を歴史の中でどう位置づけて見ていたのか。やはり、東方の野蛮国というイメージが非常に強い。東夷の中の倭の国です。中国の関心の的は、常にまわりの国に対して朝貢国として、きちんと貢物を持ってくるのか、そうではないのかという点にあります。

この観点からみますと、日本は江戸時代になるといつの間にか、朝貢国として貢物を持ってこない国になってしまいます。十六世紀末にできた明代の書物『萬厯会典』の中に、日本は朝貢国の名前の中に登場します。これは朝鮮、日本、琉球、安南、カンボジア、シャム、チャンパなど、これらの国は一つの朝貢国の群をなし、きわめて忠実に使節をよこすと書いてあります。その他に内陸アジアの色々な国、南方海上からも五十か国以上もくるという具合に、ひんばんにくる国、たまにくる国、非常にまれだけれどもとにかくくる国というふうに分けていますが、その中において、日本は明代までは忠実なる朝貢国の中に名を残しています。

ところが、これが清代の書物になりますと、具体的に言いますと一八一八年にできました『嘉慶会典』という本ですけれども、この中に朝鮮、琉球、ベトナム、ラオス、シャム、こういった国々はひんぱんにくる国として書かれ、オランダとかビルマとか、これらも時々くる。その他、ポルトガルやイギリスなども時々北京に使節を送った国として、朝貢国として記録されますが、この書になると日本が完全に抜けている。その抜けているということが、やはり中国がどう見ていたかということの一つの証拠になるかもしれません。

その中で、江戸時代の琉球は非常にまめに中国に対して使者を送ります。もちろん日本にも使いを送りますし、その状態を、現場にいる人間は知っていたかもしれませんが、北京政府はそれをもろろ認めないわけです。琉球が両属であるということ。そんなことはどうでもいいことであって、自分の国に対してどういう態度であるかが問題なのです。

明治になって琉球が日本の属国になった。そこではじめて中国政府が驚いたといういきさつがあったということを、中国史を研究している方から聞いたことがあります。事実を知らずに、また知ろうとせずにとだ驚く。結局、自分の国をあまりにも中心的に考えてしまうがために、よその国に対してなおざりになる、その国の文化や歴史などそれ程の関心を持たないので、琉球にたいする見方も、なおざりになってしまったのかもしれない。とにかく、江戸時代から何百年も続いていた日本と琉球との関係を公的には知らないで来てしまったということが、後の歴史に大きな影響を与えています。

もう一つは、朝鮮という国が日本を見る場合に非常に面白い位置づけをしてくれます。この朝鮮国は常に中国に対する忠実な従属関係を持ちます。そして、中国は朝鮮からの使節を通じて日本と朝鮮との関係のあり方を知ります。ところがこれも時代によって差があります。朝鮮でも明の時代には非常に頻繁に使節を送りますけれども、清の時代になりますと希薄になってきます。これはなぜかといいますと、清はやはり野蛮国がつくった国であるから、そのような国に対してはままでのような漢民族の国に対してやったような朝貢をする必要はないというような心情があるからなんです。清代の初めに、朝鮮は屈辱的な朝貢を強要されたという恨みも重なって、清国に対してはきわめて形式的な、かつ希薄な形でしか国際関係を持たないようにしよう。

そういうような朝鮮が、今度は日本をどう見るかといいますと、

中国と似た感じで一貫して倭国という態度をとり続けます。日本人は倭人である、野蛮人であるという形をとります。他国に見せる必要がない朝鮮の書物には、日本は倭国、人は倭人、釜山の居留地は倭館と書いています。これはやはり秀吉の侵略に対する恨みが重なっています。いままで相当下に見ていた日本というところから逆に侵略されてしまったということに対する恨みと、そうした屈辱意識が非常に複雑にからみあっているのではないかと思います。清国に対する気持とどこか通じるようです。従って、日本からくる使者に対しては釜山という片田舎でだけ応接しまして、決して都に入れようとはしません。

これとは逆に、朝鮮から来た使節は、日本の場合には必ず江戸まで連れてきてまして、これを非常に歓待して帰します。その使節団（通信使）は四百人ぐらゐが江戸まで行列してまいりますので、日本人は外国人というものをそこで意識するわけです。行列の沿道には大勢の人間が集まってきてまして、おそらく何百万人も人間がそこで外国人というものを見る機会が与えられたことになります。庶民のレベルに至るまでその人々を見ることができます。目の前を通りすぎるパレードの中から、日本のものとは異なる異国風の楽器の音が聞え、極彩色の旗や着物、意味の分からない言葉など、いろいろなことを目にするチャンスがあったわけです。

庶民のレベルまで、通信使そして琉球の使節も通じまして、外国人を目のあたりにする機会があった日本では、外国を意識し、かつまた逆に日本を意識するということも行われたのではないかと。ちなみに朝鮮国王と日本の將軍は、対等のレベルで、国書を交換いたします。アジアの中で將軍の位置づけがなされていたということですね。

そういった意味で「鎖国」というものを見ますと、日本はかつて秀吉時代に徹底的にアジアの中で暴れまわったあげくに、やがて家康、秀忠、家光時代を通じて、今度は勝手に平和をつくりあげて、自分で勝手に納得のいく形で国際関係をつくっているということに気が

つきます。そして、その中にキチツと階層をつくっている。朝鮮国にはその中で最高のレベルで応接している。琉球とは朝貢扱いということをしている。オランダはカピタンが江戸に参府するたびに完全に江戸城でみせ物扱いをされていますね。中国は外交を持たないで貿易だけやる。外交を持ちますと日本が朝貢をしなければならぬ立場に置かれるのであえてやらないという態度です。

これは「鎖国」の一つのあり方だと思われまうけれども、これを外国がどうみるかということとは全く別です。つまり中国にしてみれば関心が無い。そんなもの日本が勝手にやっていることです。朝鮮のほうは、日本が暴れるよりもまだましだと、しぶしぶながらも認める態度をとるわけです。

ですからこの構図は、日本が勝手につくりあげたもので、決して相互に国際法などでキチツと承認されたものではない。ただ国際法というのは、慣習がそのまま定着していくことが多くありますので、たとえば江戸時代に朝貢扱いされていた琉球が明治時代になってあのようにな位置づけになる歴史的背景があったことも考える必要があるかと思えます。

では、なぜ「鎖国」のような国際関係をつくり上げることが可能となるのか。この点については地理的な問題をどうしても考える必要があると思います。大陸の火種が飛ぶには、日本はちょっと遠い。前近代世界におきましては、海というものが非常に重要な意味を持っています。ある韓国人の学者と議論したときに、決定的な日本と朝鮮半島との違いは、その地理的な環境にあるということになりました。陸から続いている朝鮮半島は南の方に、割と近い位置に、文化的にもそれ程違わない一国の独立国（日本）をもっている。

日本は、南のほうに海が続いていて、朝鮮半島のように外国に囲まれている。従ってその中で自分独自のあり方で歴史を作り、適度に漢文化の刺激を受け入れる。それには非常に柔軟に対応でき、要るも

のとそうでないものを取捨選択をしながら、独自の文化を作っている。外敵の侵入によって一方的に歴史をねじ曲げられるということは、結局ある時期まではほとんどなかったといっても良い。そんなことを考えないで済む日本。大陸の歴史の変遷に無縁であることを許されなかった朝鮮半島とはまったく違う歴史、文化を日本は享受することができた。外国に対する日本人独自の思想には、こうした背景があるということも同じように考える必要があると思います。

ヨーロッパ人の日本にたいする見方ですけれども、これも歴史の中におきますと非常に長い話になってまいります。その昔は遠すぎる伝説の島であった黄金の国が、実際についてみると銀の島であった。後には銅の島であった。いずれにせよ、非常にもうかる島であったということにいずれ気がつくわけです。彼らは建前上キリスト教の布教という名目もありますので、そうした文化も持ってまいります。しかしながら、やがて彼らの本音はどうしても貿易、つまり経済的な利益の方にでてきます。日本ではめずらしく銀がとれるということで、アジア貿易の中で、東南アジアの香料と同様に重要な財源となります。

そうしますと、キリスト教布教という建前と、もうけたいという本音の部分が対立してしまいます。もちろん宣教師の本音にもキリスト教の信者を獲得したいということもあると思います。イエズス会における成績という面もあるかもしれませんが。そういったものが非常に複雑に日本において展開されてきます。そうした中で日本はキリスト教はだめだということ、最終的にポルトガルとの関係を切り離し、オランダだけをパートナーに選ぶ方向をとります。さて、そこで今度は幕末になってヨーロッパ人がどっと日本に入ってきます。

ある意味では、彼らがやってきた日本というのは、江戸時代の総決算としての日本であり、彼らが見たのもそれだということになります。

その中で彼らは、一様に日本に対して、またいろいろなことを感じとります。彼らはアジアの中において、近代的な外交でもって次々とアジアの国々を開国させていきます。インドとか中国とかいろいろな国に行つて、やがて日本という国にやってきます。その中で一様に彼らがいだくのは、アジアにありながらなぜかアジアという雰囲気薄い国というイメージです。彼らののこした見聞記には、きまってそういう感想が出てきます。

ここに一冊の書物を持ってまいりました。これは「ニコライの見た幕末日本」という本であります。お茶の水にニコライ堂という教会がありますけれども、あの名前の由来の主で、函館のほうに派遣されたロシア人宣教師です。日本に何年か滞在しまして、言葉も覚え、幕末日本で見聞きしたことを書いています。その書物の最初に書いてあるのが、日本は不思議な国だという文章です。日本はアジアにありながらアジアでないとしています。そしてニコライが最もおどろいたことは、一般庶民の教育レベルの高さということです。こうした書を含めて、この時期の人たちは江戸時代の総決算の日本を見ているわけで、それが彼らの日本に対する一つのものの見方というものに重要な影響を与えています。

コメントとして切り込み方がいろいろあるというふうに司会の方がおっしゃってくださいましたので、安心して勝手に言わせていただきました。観念の世界とはまた違う歴史体験の世界ですね。日本がアジアの中でどんな国際関係を持ちながら日本という国を自分自身で意識し、かつまたほかの国の人たちに意識させてしまったのかということ。そんなようなことを、思いつくままに、コメントさせていただきます。

本間 ありがとうございます。

田代先生は、観念に対して体験という立場を取られました。特に鎖国時代から明治のはじめの期間、それからまた特に当時における日本の国際関係の規定の仕方、——それが要するに日本の位置づけであるわけですが、——にふれられまして、それから朝鮮との関係、あるいは朝鮮から見た日本、日本から見た朝鮮という要素も付加され、西洋が見た近代のはじめの日本といえますか、鎖国が終わった後の日本ということでは具体的な例に即して、アジアにありながらアジアらしくないという、——これは先ほどヴァン・ドゥ・ワラ先生がおっしゃったことと関連してくるところかと思いますが、——そこでコメントを終えられました。

それではディスカッションに移る前に、報告者でありますヴァン・ドゥ・ワラ先生に、いまのコメントに対して、差し当たっておっしゃることがあれば短くお願いいたします。

ヴァン・ドゥ・ワラ 田代先生のコメントは非常に面白いと思います。つまり、思想史の立場と社会史といえますか、あるいは観念史の立場と社会史の立場の対立じゃないけれども、そういう区別をご指摘なさったわけです。でも、私は別に観念思想にこだわっている人間ではないんです。ただ、割り当てられた時間の関係もあって、そういうテーマを負わされるとどうしても歴史的な具体的なものにふれることは不可能になってしまいました。言いたいことをできるだけまとめていくにつれてだんだん抽象化してしまい、結局いつの間にか非常に観念的なものになるわけですね。

その観念がどれだけ歴史を支えたかということに対して、私は非常に疑問を持っているわけですが、そういう作用が皆無であるとは言えないと思うんです。ある意味で歴史の駆動力にもなるころはあると思います。私も歴史学的环境で育ちました。ですから、史実をできるだけ詳しく追求していく過程において、はじめて歴史の深層が見えてくるんじゃないか。という点についてはまったく同感であるわけです。

田代先生のコメントは私の説明を補う意味でたいへん有意義なものであつ

たと思います。諸外国が日本をどういうふうに見たかということについて、いろんな面白いご指摘がありました。特に私が感心したのは、江戸時代の総決算という概念ですね。まさしく幕末、維新あたり、そういう江戸時代の総決算が非常に大事なポイントであって、それをもっと具体的に追求していく過程において、もっと正しい歴史の理解というか、解釈ができると思います。

とりあえずそこまでにとどめさせていただきます。

本間 ありがとうございます。

それでは皆さまからご質問、ご意見を伺いたいと思います。どなたからでもどうぞ。

ペフ ポイントがふたつございます。ヴァン・ドゥ・ワラさんは文化の定義という問題を出しておられますが、文化という概念が何を意味するかという点について、我々は今まであまり深く入らないでいたわけです。昨日でしたか、米山さんが、日本には百の文化があるというようなことをおっしゃったんですが、一体どういうふうに定義をしたらいいのかということ一言申し上げたいんです。一つの方法は、ヴァン・ドゥ・ワラさんがお書きになったように、いろいろな価値、言語等を共有しているものの複合体という定義なんです。まずどういう要素を取り上げるのか。言語の場合、日本語だけなのか。アイヌ語は入らないのかといういろいろな問題があります。昨日でしたかクラハットさんがおたずねになりましたように、ではそういう要素を持っていない人は欠陥日本人なのか、あるいは非国民なのかということになってくると思うんです。

そういう非難を避けるために、全然別の定義をここで提案したい。その定義が必ずしもいつも役に立つということではなくて、そういう見方もある。場合によってはそういう定義の使い方もいいのではないかと。いうふうに柔軟に考えていただきたいんですが、私の申し上げるのは、文化というのは日本には一億二千万ある。つまり一人一人の日本人の頭の中にあるものでして、一人一人の頭の中にいろいろな要素が入っているわけです。それが

その人の文化をつくりあげている。そして、複数の日本人の間にはある程度のオーバーラップがありますので、そのオーバーラップがお互いのアイデンティティないしはコミュニケーションというものを可能にしていける。基本的にはそういう見方を取っていくというやり方もあるのではないかと、ここを、ここで提案したいと思います。

ふたつ目は、それにやや関連するかもしれませんが、日本人自身による日本の位置づけで、一体日本固有のものは何かということ。日本固有とは、外国から伝来したものの以外のものであるというふうな考え方がここにあるようにすけれども、日本列島は元来人間が住んでなかったところへ人間が来るようになったところですね。何度も何度も文化の伝播があつて、現在の日本ができるわけです。弥生あるいはその前の縄文時代にいきますと、一体何回伝播があつたのか、どこから文化がきたのかということ、非常にわかりにくい。日本固有の何かがあつて、それに今度は外国から、大陸から従来の伝統的な日本以外のものが重なってきたという見方は、少しおかしいのではないかと。日本文化ははじめから外来文化の入り混じったものだという見方のほうが正しいのではないかと思うのです。クラハト ヴァン・ドゥ・ワラさんには、本当にいろんなことを学びました。どうもありがとうございます。

しかし異論があるところは、率直に言います。ふたつか三つの例をあげたいと思います。

まず神道についてですね。あなたは神話時代という言葉を使いますが、それは何を意味するのでしょうか。それは神代ですか、人代ですか。いつですか。神話時代には外国という概念も意識もなかったと思われとおっしゃいました。その時代はいつでしたか。古代ですか。知性が地平線までしか及ばない古代日本人、などというものがいたのですか。たとえば「魏志倭人伝」を考えてください。「魏志倭人伝」を見ますと、弥生末期の北九州の人の生活状況は大分わかります。それらの人たちは、割合に、朝鮮半島だけではなくて、洛陽のことでも知っていたのではないのでしょうか。

もちろん神話の高天原、黄泉の国などは意識していたかもしれませんが、しかし、まず北九州などの人たちが考えていたのは、朝鮮半島や、中国だったのではないのでしょうか。中国とはまた難しい言葉ですね。あなたはよく中国という言葉を使いますが、そういう言葉を、日本人はいつから使いましたか。

それから、国学による世界観の転換ということについて、コメントしたいと思います。徳川前期における思想史の主流をなすのは儒学の世界観ですね。儒学という言葉だけではもちろん少し簡単すぎます。儒学にもいろいろ流れがあります。その立場は、場合によってずいぶん違うでしょう。たとえば林羅山の場合を見ますと、「三徳抄」の林羅山と「神道伝授」の林羅山はずいぶん違います。あなたが問題にされた山鹿素行ですが、「聖教要録」の山鹿素行と「中朝事実」の山鹿素行は、全然別の人間ですね。あるいは、「弁明」の荻生徂来と「旧事本紀解文序」の荻生徂来はまた別のことを言っています。「旧事本紀解文序」の荻生徂来は、たとえばこういうことを言っています。中国という言葉はもちろん使っていないのですが、「もし聖人が現代の我々の国日本にいたならば、ぜひ日本で生活したいと願うでしょう。そんなすばらしい、天皇、皇室のある国。それが日本です」というふうな言い方ですね。それは、彼の前の態度、すなわち日本人は遠い東の野蛮人であるとする態度と全然違う態度です。

いま申し上げた三人にも共通点はもちろんあります。それは、日本帰帰のモチーフであるかもしれませんが。晩年になって、また日本へ帰る。まず中国を崇拜しましたが、その後、老人になって日本のことをほめるようになるというモチーフがあるんです。そういうことは、絶対に日本だけのモチーフではないですね。日本帰帰、ドイツ帰帰、アメリカ帰帰、そういうことについて、私は専門外ですが、大体どの文化にもあるでしょう。それは徳川時代だけではない。しかしあなたが言う儒学では中国が中心を占めている。それはちょっと簡単すぎるのです。それはいいかもしれません。マセ クラハト先生もおっしゃったんですが、神話時代という表現はちよっ

と問題になります。古墳時代になると大陸との交流も大分ありましたから、外国の概念が全くなかったとは、言えませんが。そして、面白いのは、神話そのものにも外国のことがでてくる点です。よく知られているように、日本書紀によると、スサノヲは朝鮮半島に天下ります。また、ヒムカ（日向）のことも、朝鮮に向かっていてから、この名前があるわけです。この点で神話の中にも外国の概念がありました。

普通、たとえば中国の場合、外国という概念が弱いかもしれません。古代エジプトの場合もそうでした。それからインカ帝国もそうでした。これらの文化は、自分が世界の中心であると信じていました。つまり、まわりの文化を殆ど無視していたわけです。でも、日本の場合は、始めから他の立派な文化がありましたから、無視できなかったのだと思います。

もう一つとても感心したのは、琉球のことです。琉球についてのご報告は、とてもよかったと思います。でも、それにたいして北海道のアイヌの問題もあると思います。

ヴァン・ドゥ・ワラ まずベフ先生のご指摘で、文化の定義ですね。確かに百の文化がある。私の定義だと、たとえば同じ価値を抱いてない人は日本人じゃないとか、そういうことになるんじゃないか。そういう危険性をご指摘なさったわけですが、私が言わんとしていることは、別にベフ先生の新しい定義とあい入れないものではないと思うんですよ。つまりこれは、みんなまったく同じ言語を話し、みんなまったく同じ価値観を持ち、同じ習慣を持つという意味ではないんです。言語だって、一番確認しやすいものだというていごのことですね。コミュニケーションあるいはフォークロアという言葉を使ったでしょう。私もそういう意味をふくんどうえで書いたわけです。

私もある共同体に属しているという感覚は非常に強いんです。なぜかというと、私の教わった言語でコミュニケーションができるからです。さらに、学校で一定の経験を一緒にしているわけですね。よく私が感ることですが、日本人と話すときは日本語でコミュニケーションをするわけです。

ただ、私が日本人と非常に違うことは、小学校、中学校、高校の体験を共有してないということ。そういう自分の少年時代における経験が共通でないということは、非常に大事なことです。

次に、日本固有。皆さんに対してまず最初に断っておきますが、やはり報告の分量がかぎられていると、どうしても山鹿素行とか、林羅山とか、それは初期とか晩期とか言う余裕が、全然ないわけです。どうしても省略してしまいます。そして、やはりジェネライズすることは、ある意味でうそをつくことになるわけです。儒教といっても完全に一個人の発想もあるし、その生涯においてのいろんな経過がありますからね。要するに歴史をどうやって、どういう方法で理解しやすくするかということです。人間の思考は、区切りをつけるということです。そして、区切りは便宜的なものであって、いつまでたっても最終的に肯定されうる区切りなんて成立しないと思うんですよ。

神道というテーマでも、これを本当にやりだすと、百ページぐらいになりますから、どうしても区切りをつけなければなりません。私が神話時代と言うのは、我々が文献とか考古出土文物を通じて確認できる時代のことです。

もちろん、外国の要素が少しあったとか、それはいくらでもいえる。たとえば鏡があったんじゃないか。これは中国の鏡じゃないか。弥生時代になると、中国大陸との交流が、もちろん出てきますよ。それを無視しているわけじゃないんです。でもさかのぼって、縄文時代の出土状態を見ますと非常に孤立した共同体の生活が認められると思うんです。それは完全に、まったく外国の意識がなかったんじゃないか。それがあったにしても非常に薄くて、日常生活にどれだけ認識されていたかというところ、ほとんど認識されていなかったと思うんですよ。

さらに、現在でも、大体同じ状態にいる部族文化とか、あるいは森林地帯に閉じこもって生活している部族文化がありますね。そしてそれらを検討し、あるいは転用してみて、当時の日本人のそういう部族文化の意識に

ついでには、イメージをつくるほかにいんじゃないですか。出土文物というものはひとくことはできないから、それを見て、当時の社会生活を復元するほか仕方ないんです。出土文物は、いくらでもできてますし、出てくるにつれて、もちろん訂正の余地があるわけで、いつまでたってもそれは最終的なことではないですね。それは認めますよ。

中国のよびかたにも、もちろんしとか、唐の国とか、過去においていろんな言葉があったわけですね。私の使ってる中国の意味はいは、やはり一つの重要な文化の源泉と認識される共同体といいますが、中国の中原を中心にしてだんだん広がっていく共同体であって、それはひとつの文明であるわけですね。でもそれは地理的に限定できるわけではない。弥生時代の中国、秦時代の中国は江南に及ばないと思うんですよ。

江南に楚国があるでしょう。楚辞の楚の発祥地であって、楚辞の文献というか、漢文を読みますと明らかにするように、本当に中国じゃないんですね。明らかに別の言葉であって、越南をはじめとした異文化が密集しているところだったんですよ。中国と言われるものは中原地帯から発生したものでだんだん広がっていった、江南の文化も抹消し、同化していくという歴史的な存在として使っているわけです。唐の国と言ってもいいですよ。もちろんしと言ってもいいし、中華でもいいわけ。要するに、中国はもうまぎれもない存在だと、僕は思うんですよ。日本人の目にもそうだし、中国周辺の国々にもそうだと思うんです。

日本回帰という回帰型の思想はどこにもあるんじゃないかということですが、それはまさしくどこにもあるわけで、だけど、どこにもあるからといって別に無意味なものではないと思うんです。日本の歴史、あるいは日本思想史の中においても回帰型の思想と、あるいは中華本位思想、それがうねりのように出てまいります。でも、やはり先ほどの区切りという意味で、中国に傾いているというか、中国に規範を求めているのに対して、日本回帰の色彩が濃厚になる場合は、区別しうる。要するに区切りの手立てにすぎないと、私も、もちろん思いますよ。でも、やっぱり歴史学の一つ

の大きな役割は、区切りをつけることだと思う。区切りによって、整理のつかない、混沌としたできごとの流れを整理することができるわけですから。

これでよろしいでしょうか。

本間 昨日とうって変わりました。今日は方法的な議論に傾斜していく感じがありますが、前にもお手が上がっていたエセンプルさんと芳賀さん、おふたりでまたお答えいただいて、あとは、時間がありませんというようにいたします。おふたりの質問、コメントを伺った上で、田代先生からも、もしご発言があればやっていただくことにいたします。

エセンプル 私は、ヴァン・ドゥ・ワラ先生と田代先生のコメントをたいへん面白いと思って感心しました。そして、田代先生のコメントに加えておきたいコメントがあります。

日本の鎖国政策は、外交政策ですね。純粹に鎖国することじゃない。中国とのつながりはこういうふうにして、これこれのことはしないようにする、貿易だけにする、韓国とはまた別にするとか、こういうのはひとつの外交政策です。けれども、これには日本のそのときの、対外的な原因や、目的だけがあるんじゃない、ちよつと政治的な、内政的な目的もあったと思うんですよ。実はこの外交政策の原因は、外国に対してという態度である以上に、実は大名に対しての恐れということではないかと思うんです。

戦国時代を見ると、みなバラバラですね。自分が勝手に船を送ったり、貿易したり、大名によっては自分からクリスチャンになりました。後で考えてみると、徳川に対してはライバルみたいな形であったわけです。ですから、鎖国をして、貿易なんかある程度江戸幕府だけの責任にする。モノポリにするということは、実は幕藩制度を国内で維持するためだと思ふんです。そうしないと、その時期の徳川の力を持っても、島津とかそういう偉そうな外様大名のところに新しい国々ができたかもしれないですね。徳川の政権にとっては、それをくいとめるのもやっぱり大事な利

益だと思ふんです。

アジアに対して、中国に対して、韓国に対しての関係もそうです、全国の一つの考えだけじゃないんですが、国内的にも幕藩制度を安定させて、それで徳川の家がちゃんと將軍としてプライオリティをもらうんですね。ちょっとプライオリティをもらって、大名をもうちょっとコントロールする方法。それがアジアとの関係のとりかただったと思います。

芳賀 田代さんのコメントは実にエクセレントでありました。田代さんの頭のよさが非常によくわかりました。みごとなもので、その中で、鎖國のもとの外交関係、そこに周辺諸国に対してハイアラキーがあったというようなこと、これも中国、朝鮮、琉球、それぞれに位置づけがあったというところも、非常に斬新で面白かった。その中で出てきたのは、海の問題ですね。これは、日本の歴史を考えていく場合、いつの時代でも非常に重要なファクターである。おそらく日本の歴史には、唯物論よりは唯海史論のほうがはるかにあたるのではないか。常に海のことを考えて歴史を考えていくといろんなことが解ける。その点の指摘が非常に興味深かった。

古代、中世、近世というようなことを考えるときは、日本と中国、あるいは朝鮮半島の間の海が非常に大事ですが、一方では背後に太平洋という海があって、明治に至るまで何の名前もない、ただの水の砂漠が背後に広がっていた。これも日本の歴史を考える上に非常に重要な役割を持っていたということをお願いしたいと思います。田代さんはいま朝鮮との関係のことをやるから、むしろ側の海は大事であります。しかし、そのときも裏側に太平洋という、いわば水の巨大な防壁があったということ、これは日本の第一の安全保障、日本の歴史を守り続けてくれた万里の長城であったということをおきたい。

ヴァン・ドゥ・ワラさんのご報告は日本の位置づけという一種のヒストリー・オブ・アイデアズでした。これも非常に面白かったんですが、その中で、仏教的世界観や中国的世界観が日本に翻案されていく過程を述べられて、その後に急に山鹿素行が出てきます。ですが、日本では『古事記』

や『日本書紀』、あるいは万葉の時代からすでに一種日本中心主義的なとならえ方が、日本国土に対する考え方があったんじゃないか。

それが「あきづしま、大和の国」というとらえ方です。本来は奈良盆地をさしていたんだけど、朝鮮との国交が頻繁になるにつれて、すぐにそれが日本全土に対してのイメージになっていく。それは『古事記』に出てくるし、万葉の「大和にはむねやまあれど、とりよろう、天の香具山。登り立ち、よみをすれば」というあの歌からはじまって、それからすぐにそれが日本国土全体の一種の美称になっていく。

それがずっとつながって、たとえば世阿彌の謡曲の中にも出てくる。「あきづしま、大和の国」であって「四海、波静か」という位置づけですね。そういうイメージがずっと根強くあるんだろう。それが国学の時代になってくると、またもう一回強く出てくる。

ヴァン・ドゥ・ワラさんは、仏教、中国からの世界観の翻案の中で辺地粟散という位置づけだけしていたというふうに日本人を見られておりますが、それだけじゃない。そういうものを受け入れながらも、日本は日本なりに見ようという、俯瞰する、パーズ・アイ・ビューで押さえるという見方も、当時ずっとあったんじゃないかということでもあります。ともかくも、それぞれの国民が自分の国土をどういうふうイメージしてきたかという歴史を考えることは、非常に面白いと思っておりますので、今日のヴァン・ドゥ・ワラさんの発表はそれに非常にいい知識を与えてくださいました。ありがとうございます。

馬 おふたりの先生のご発表とコメントをととても興味深く拝聴いたしました。とてもいい勉強になりました。今日のご発表の中で、いつも中国中国と言われて、ひとりの中国人の私に刺激あるいは緊張を感ぜさせてくださっている。素人ですけども、ふたつ、感想とか質問をさせていただきたいと思ひます。

ご発表の中で、中国伝来の世界観について『爾雅』という文献を引用されましたが、引用された『爾雅』についての説は、日本人が自分自身を見

たときの日本の位置という観念にどのように影響しましたか。あるいは、日本人はどのように翻案しましたか。孔子の時代、つまり紀元前四〇〇年、『爾雅』よりずっと前ですが、このときでさえ孔子は、もし私の理想が実現できなければ海を渡って海外へ行きますとのべています。その時代の、中国にも、海外観とか、そういう思想はありました。

『爾雅』と同じころにできた『山海経』という本があります。中国の古文書ですね。その本の中で、最初に倭についての記録があります。原文ですと「外国は、大苑の南、倭の北にあり。倭は苑に属す」となっています。つまり、この作者は外国の地理的な位置を紹介するときに、すでに倭の位置を述べました。ここから、倭のおおまかな地理的方向を知ることができます。けれども、この倭がいまの日本をさしますかどうか、まだ断定するのは難しい。けれども、後漢になると、王充の「論衡」、また班固の「漢書」にも二か所、倭についてともに記述があります。それは確かです。

もちろんその後の「三国志」の「倭人伝」もありますが、倭の国について田代先生もご自分のご感想を発表されましたが、倭の国については別の説があるかもしれません。倭の国は、日本語から翻訳されたという説もあります。中国人の中国学者は、いまそういうことについて研究して、中国と日本の翻訳史の第一歩をふみだしたんですが、そういう説も出ました。

中国伝来の世界観についての感想は以上ですが、もう一つ、最後の部分、漢字文化圏についての先生のご発表ですね。つまり、漢字文化圏への復帰と、一九七二年の日中国交回復には、何らかのつながりがありますか。それがちょっとわかりません。中国は日本だけでなく漢字の影響を受けた朝鮮とかベトナムとか、みんなと国交を立てましたが、そうすると朝鮮、ベトナムも漢字文化圏に復帰したと言えますか。それが質問であります。もちろん先生も、日本が漢字文化圏に属するという認識は日本人にも中国人にもかなり薄いと言われなければならないと言われましたが。

また先生が漢字の国の中国がどうして近代化に成功しなかったかと言われましたが、私に言わせるならば、今日の先生の発表のテーマのとおり、

中国は世界における中国の位置を改めて、もう一度認識しなければならぬと思います。今日はみんな中国中国と言われましたが、いまの中国にも、真ん中の国とか、中原、あるいは中心、中核の国とか、そういう昔の認識がまだ生きているかもしれません。私がつくづく感じたのは、いま近代化について、中国にとっては科学技術の近代化より思想・文化の近代化とか、教育の近代化とか、法律の近代化、つまり近代化思想を持つ人間を養成するのがもっと重要ではないかと、思います。あるいは、物質文明を求めると同時に、精神文明に力をもっと入れなければならないと思いました。

以上です。

ヴァン・ドゥ・ワラ エセンベルさんのご指摘は、それはそのとおりだと思います。国内事情というお話には、異議を申し立てる余地がないと思います。いろんなファクターが作用しあって、確かにその方向に輻輳する形になっていると思うんです。

芳賀先生がおっしゃるように、万葉時代から「あきつしま」という言葉は確かにあるんですけども、歴史を数学的に分析することは不可能であって、それを全部数字に置き換えることができれば、たとえば五回とか十回出てくるとかがわかれば、もっとはっきりするんですけども、インド伝来の仏教における世界観と比較できるほどの重要性は帯びてないんじゃないかと私は理解しているんです。ただ確かにあることはあります。『爾雅』と『山海経』ですが、私がこの文章において言いたかったのは、あくまでも非常に簡略にした形による中華思想の展開ですね。要するに文献学的なアプローチじゃないんですよ。適当に、代表的な文献からそれを裏付けられるものを二、三引っ張り出して登載しただけなんです。でも、確かにおっしゃるとおり『山海経』は、非常に大事な文献であるし、倭国という観念の成立と展開も非常に大事だと思います。それはご指摘なさったとおり、たいへん参考になります。

さらに、漢字文化圏への復帰と国交復活ですね。これはもちろん私も不賛成です。ただ、欧州の一部の学界の一部にはそういうふうには漢字を過大

評価する傾向があるわけで、そのあらわれであるという指摘をしたまでです。私は、実はそれを否定するためにここに書いたわけです。これは必ずしも「ル・ヌヴォ・モ・シニゼイ」に限るわけではないわけですけれども、代表的な著作という点であえて出したわけでございます。

最後ですが、どうして中国が成功しなかったかという点です。これは非常に複雑な問題です。私は国の規模というものが、近代国家の成立にさいして非常に大事であると思います。やはり一語一国民一国家というのが基礎になるわけで、中国の場合は規模の上では近代化を成功させるのが非常に難しいんじゃないかと思います。一番手頃な大きさはこれはフランス、イギリス、日本という国ですね。とにかく、地勢的な問題とか、人口学的なものとか、非常に大事だと思うんです。

たとえば、フランスの歴史を見ますと十六世紀、十七世紀は異文化を持っている少数民族はたくさんいたんですよ。でも抹消されちゃったわけですね。いまかろうじて、少しかだけ、近代化の過程の中で、伝承という形で残されているにすぎないんです。確かに中国に少数民族が多数存在すると同様にフランスにもいたわけです。でも、フランスの国は陸続きで、中国に比較すればあまり大きくないんですよ。だからそれがいち早く成立したと思うんです。人口学的な要素も、経済学的な要素も考えに入れる必要があると思うんですけれども、フランスは近代になっていち早く人口が拡大していった、経済的な沃地がたくさんあって、経済的な繁栄をなしとげたわけですね。それが非常に大事だと思うんですよ。数字ですね。人口学が極めて大事だと思うんです。中国の場合は規模が大きすぎて、これが国民国家の成立が遅れる要因の一つじゃないか。もちろんそれにつきるわけじゃないですけどね。

精神文化と科学文明のご指摘ですけれども、まさしく中国的なご発想じゃないでしょうか。要するに、精神的な文化が大事、それは私もそうあってほしいけれども、やっぱりその反面も重要なのであって、マルクス主義的に言えばいろいろな下部構造が、やはり文化を大いに決定する、左右する

ものじゃないかと、不本意ながら思っているわけです。

本間 どうもありがとうございます。

トピックがたいへん大きなもので「東アジアにおける日本の位置」ということでございましたので、私はいろいろなやりとりの中から、やはりヴァン・ドゥ・ワラ先生の代表例を使いながら議論をたどっていくというやり方が一つの有効なやり方である。いろいろつづいていきますと、それぞれセンテンスごとに問題が出てくるということになりかねない。それはまた一年かけてやるということではなかったのではないかと今ふうに思います。ただ、東アジアという観念はだれがいつ持つようになったのか。単なるオリエントじゃなくて、単なるアジアじゃなくて、東アジアという観念をだれが持つようになって、その中の位置というのは一体国際的な力関係とすることを抜きにして話をするのかどうか。自分がどういうイメージを持ち、相手がどういうイメージを持ったかというレベル以外のレベルの話というほうが、むしろ素朴なこのトピックに対する反応ではないかと私は思っていたんですが、そういうレベルの話はまたきつと別なシンポジウムで国際日本文化研究センターがお考えになるのであらう。

独立文化という最後の言葉がわかったようでよくわからない。中華文化圏でもなく、漢字文化圏でもなく、西洋文化圏でもない、しかしある非常に大きなもの、無視できないもの、そのために日文研さえてきているような、そのもの、それは何なのかという問題があるわけですが、それは実は先ほどの精神文化と物質文化というような問題の立て方のぜひを含めまして、次に飯田先生が珍獣論とか、次々に片づけてくださるはずでありますので、改めて次のセッションでご議論いただきたいと思います。

どうもありがとうございます。